悲劇のメキシコ皇帝マクシミリアンⅠ世

メタデータ	言語: jpn 出版者: 明治大学教養論集刊行会 公開日: 2009-04-15 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 菊池, 良生 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/5000

悲劇のメキシコ皇帝マクシミリアンI世

菊池良生

I　マックス誕生前史

一八三二年七月六日、ハプスブルク家、夏の離宮シェーンブルン宮殿で一人の男の子が生まれた。父親はオーストリア大公フランツ・カール、母親は大公妃ゾフィーで、この男の子はときのオーストリア皇帝フランツI世の嫡流の孫にあたる。しかし、いわゆる皇太孫ではない。フェルディナント・マクシミリアンと命名され、家族にはマックスと愛称されるこのプリンスは大公家の次男坊である。それに父フランツ・カール大公も祖父フランツI世の次男であり皇太子ではない。

すると、気の早い話だが、この生まれたばかりのプリンスはやがて時がたち、自分の従兄弟、甥が生まれるたびに徐々に徐々に傍流へと押しやられ、そしてその子孫はいつかは臣籍降下ということになるのだろうか。否、そうはならない。なぜなら、このプリンス、マックスの生まれたカール・フランツ大公家にやがてハプスブルク家の皇統が転がり込んで

くることは、言わば公然の秘密であったからである。だからこそ、マックスの二歳上の兄フランツ・ヨーゼフの誕生に人々はみな固唾を飲んだものである。彼の誕生はまさしく国家行事であり、オーストリアは沸き立ったのだ。

それでは、なぜ今上帝フランツI世の次男坊家がやがてはハプスブルク家の宗家となるに決まったも同然なのか。順を追って話さねばならない。それにはマックスの母ゾフィー大公妃が隣国バイエルン王国の王家ヴィッテルスバッハ家より、ここハプスブルク家に輿入れしたあたりから説き起こすのが最も都合がよいだろう。

言うまでもなく本稿はフェルディナント・マクシミリアンの生涯を辿るものである。生涯とは誕生から死。膨大な作業である。ここでマックスの誕生前史を長々と語るのは余り得策ではないかもしれない。しかし、誰にでも当てはまることだが、やはり人一人の誕生前史は重いものだ。その人の生涯を決する重要なファクターとなっている。それにマックスの誕生前史を見ることで十九世紀ハプスブルク家の様々な人間模様が何となく呑み込めてくる。ここは、いささか迂遠ではあるがマックス誕生前史を見るに如くはないようだ。

マックスの母ゾフィーは十九歳のとき子供を生むためにウィーンにやってきた。しかも、将来の皇位継承者を生むためにである。バイエルン王マクシミリアンI世の娘ゾフィーが二十二歳のオーストリア大公フランツ・カールと結婚したのは一八二四年十一月のことである。このときフランツ・カールの兄、オーストリア皇太子フェルディナントはまだ結婚していない。この弟が兄を差し置いて先に結婚するという異変に際して、皇帝フランツI世の侍医の一人ヨーゼフ・アンドレアス・フォン・シュティフト博士は「皇太子殿下は不能症というわけではございませんが、殿下のお身体は婚姻生活により、お命を危うくされるやも知れぬ状態でございます」[1]という診断書をフランツI世に提出している。

皇太子が普通ではない、というのは外見からもはっきりと見てとれたといわれている。勿論、公然と口にするわけにはいかない。宮廷人はひそひそとこの話をした。殿下はお一人で階段をのぼることもままにおなりにならない。滅多に

口をおききにならないが、お話になるときは口許がひきつり、酷い吃音であられる。ときおり、お身体全体が激しく痙攣され、昏睡状態に陥られる、云々と。フォン・シュティフト博士の診断書はこの噂を医学的に裏書きしたというわけである。もっとも、この博士は意外と喰わせもので、政治的にちょこまかと動きたがり、その診断書に全幅の信頼がおけない。しかし、これは後世から見た話で、皇太子はやはり普通ではなかったようだ。

そんなわけだから、マックスの母ゾフィーがウィーンに輿入れしたとき、彼女には大いに期するところがあった。夫カールは凡庸で、兄に比べれば、まだましである、といった程度の人物である。後に「ウィーン宮廷のなかのたった一人の男」[2]とか、「気の抜けたものばかりのハプスブルク-ロートリンゲン朝のなかで一人煮えたぎっている」[3]と揶揄されたほどに気性の激しいゾフィーである。とても夫に満足できない。しかし、王族どうしの結婚に相手が好きだ嫌いだなどという個人的感情を挟むことは許されない。それゆえ、ゾフィーの個人的感情は、やがて自分はオーストリア皇帝の母となるのだ、という一点に向けられ、そこに全神経が集中される。自分はハプスブルク家に「世継ぎのプリンス」を与えにやってきたのだ、と。

しかし、なかなか妊娠しない。ゾフィーがハプスブルク家に嫁して四年目の一八二六年七月、待望の妊娠。しかし、流産。ウィーン宮廷の喜びは一遍に吹き飛ばされる。翌、一八二七年六月、再び妊娠。しかし、再び流産。このとき齢、六十に手が届こうとしていた老帝フランツI世の落胆振りは傍目からみてもかなりなものであったらしい。恐らく老帝は長男フェルディナント皇太子の悲惨な姿に我が家の悲劇の発端を見、もう一人の息子の嫁の度び重なる流産に家の断絶の凶兆を見る思いであったのだろう。その家とは老帝の祖母マリア・テレジアがハプスブルク家初の女帝となり、ロートリンゲン公フランツ・シュテファンを婿養子に迎え、以後、ハプスブルク-ロートリンゲン王朝と呼び習わされた家である。希代の英雄マリア・テレジア女帝の輝かしき嫡流の家がここで途絶えるのか。老いは焦りを呼び、老帝の悲

嘆は宮廷全体の、国家全体の悲嘆となる。

皇帝の侍医団は、しかし諦めない。ともかく、カール大公が少なくとも女性を妊娠させる能力があることが二度も証明されたのである。侍医の一人ヨハン・マルファッティ・フォン・モンテレギオ博士はゾフィーを自分の強力な監視下に置き、彼女の生活全般にわたって指導・管理することを主張する。老帝も博士の要求を認める。二度の流産で弱気になったか、さすがのゾフィーもこれを承諾する。

一八二九年十一月、三度目の妊娠。マルファッティ博士の管理は峻烈を極め、ゾフィーは全くの籠の鳥となる。妊娠安定期にはいっても、自室に閉じ込められ、散歩もままならない。ましてやゾフィーの好きなオペラ見物などとんでもない、ということになる。現代の目からみれば博士の処置はむしろ逆効果と見えるが、当時の人々はこれこそ最良の処置と、博士に全幅の信頼を寄せている。老帝は博士に全権を与える。博士は皇帝の意を体して、この将来、帝国の運命を左右するであろう難局に当たらなければならないのである。まさにゾフィーの妊娠は国家行事なのである。嗣子を生むことを定めとされたカール大公夫妻のセックスは第一級の国事行為だったというわけである。

一八三〇年八月一六日午後、助産婦シュマルツルが宮廷全体に臨戦体制を敷くように要請する。以下、ヘルムート・アンディクスの筆を借りて、この国家行事の顛末を見てみよう。

「直ちに産婦のいる部屋へと民族大移動がはじまる……中略……ここでは単に若い御婦人が子供を一人産みおとそうとしているのではない。ここでは帝国の将来を左右しかねない国家行事が行われようとしているのである。人々はこの出来事の『証人』として、単に好奇心から、あるいは真摯な関心からその場に居合わせようとしたのではない。むしろ、そこにいなければならなかったのである。こうして大公妃の部屋と、その回りの部屋々々は人々で一杯になる。親族だけが駆けつけたのではない。宮廷に出入りを許されているだれもがやってきた。将軍、女官、閣僚、副官……彼らは

階級が高くなればなるほど産婦のベット近くに寄ることができる。事はまるで国家主催のレセプションのごとく流れた。否、これはまさしく国家主催のレセプションであったのだ……中略……八月十七日になって人々は一日中、分娩室の回りに輪をつくり、あるいは室のなかに入りこんだりもした……中略……産婦は自分のまわりに何ダースもの人が立ち並び、自分の身体のどんな奥底からの動きも見逃すまいと必死になっているのを別に不思議とも思わなかった。彼女は自分の身体は自分のものではなく、国家のものであるということを常に頭に入れておくよう育てられてきたからである……」[4]。

こうして八月十八日九時四十五分、待ちに待った男の子が生まれた。老帝フランツI世の愁眉は開き、宮廷全体が沸き返った。国全体が沸き返った。ウィーンの教会という教会の鐘は鳴り響き、祝砲が次々と撃たれ、国民は続々とシェーンブルン宮殿前に集まり、口々に「皇帝万歳！」を叫ぶ。一方、他のヨーロッパ列強はウィーン駐箚大使からの情報を一つ一つ丹念に分析する。これが本稿の主人公マックスの二歳上の兄フランツ・ヨーゼフ誕生の顛末である。

それでは肝心のマックス自身の誕生のときはどうだったのか。女帝マリア・テレジアに即位の道を開いた相続順位法（一七一三年に発布）以来、ハプスブルク家は長子単一相続制を敷いている。つまり、「世継ぎのプリンス」ヨーゼフが誕生したいま、次に生まれてくる弟たちは国家にとっては長兄ヨーゼフにもしやのことが起きたときのスペアーとしての意味しかない。従って弟たちの誕生はもはや国家行事とはならない。しかもヨーゼフ誕生からマックス誕生に至るわずか二年の間にとんでもないことが持ち上がった。それはマックスどころかヨーゼフの皇位継承者としての地位をも脅かし兼ねない出来事であり、ゾフィー大公妃を一時的に絶望の奈落に叩き落としたのである。

思えば考えられないことではなかったのだ。ハプスブルク家待望の「世継ぎのプリンス」ヨーゼフが誕生してから三ヵ月後の一八三〇年十一月、ときを見計らったように、ある重要な会議が開かれた。皇帝侍医団による「フェルディナ

ント皇太子殿下の御病状」についての診断会議である。会議の結論はこうである。すなわち「皇太子殿下は急激な発作もありうる卒中ではなく、ごく軽い癲癇性の病にお罹りであられる。この御病気は殿下の御結婚にはなんら差し障りなきものと思料される」[5]。この会議の議長は六年前、皇太子の結婚は無理だと診断を下したフォン・シュティフト博士である。侍医団会議の発表は宮廷全体を驚かした。そして宮廷のだれもが侍医団の背後に、ある人物の影を見た。すなわち、ときの宰相メッテルニッヒ公爵である。

皇帝フランツI世の信任、殊の外厚く、二〇年近くにわたりオーストリアの舵を取り続け、ナポレオン戦争以後のヨーロッパに秩序をもたらした「ウィーン体制」の推進者メッテルニッヒ。この老獪な政治家の前にあっては、フォン・シュティフト博士など赤子も同然である。博士は宰相の恫喝あるいは懐柔にあい、医者としての良心をかなぐり捨て、自分の診断をあっさり覆した。これが宮廷の大方の見方であった。

ともあれ、こうして皇太子フェルディナントの結婚への道が開かれた。そしてフェルディナントは正真正銘の皇太子となる。つまり、侍医団の発表は今後、どんなことがあっても次期皇帝はフェルディナントにする、というフランツI世の意志を内外に知らせたも同然であるからである。これは宰相メッテルニッヒの強い進言によるものである。宰相はフランツI世亡きあとも、引き続き己の政治信条を貫くための環境作りに腐心をしていたさなかである。宰相は己の権力を延命せんとして、フェルディナントの名実あい並ぶ皇太子冊立を急いだのであろう。しかし、これを受けたフランツI世の思いは奈辺にあったのか。恐らく、哀れな長男への憐憫の情、そしてハプスブルク家家憲である相続順位法への執着が重なってのことであろう。それが家庭的には情が厚く、政治的には超保守的で狷介きわまるフランツI世らしい処置のように思える。

ところで、フランツI世が標榜した政治的保守思想とは、言ってしまえば「ハプスブルク神話」への妄信がその基盤

となっている。ハプスブルク家あってのオーストリア帝国。ハプスブルク家はどんな人物を宗主に仰ごうとも微動だにすることになく永遠に続く。これが当時のハプスブルク家内の保守派たちの骨の髄にまで染み込んだ妄信である。時が移り、やがて皇太子がフランツI世の後を襲い、フェルディナントI世として即位し、十三年間の治世を終え退位したとき、当時のハプスブルク一族の保守派の代表格であるアルブレヒト大公はいみじくもこう言った。「もしこの君主一族がこれまでに築きあげてきた揺るぎない高い地位がなかったとしたならば、フェルディナント帝の十三年に及ぶ治世は考えられたであろうか。一年でさえも継続できなかったことであろう。数世紀にわたって持続するほどの君主国であるならば、事の性質上、そこには他の君主よりも能力の劣った君主が周期的に現れてくるのは止むを得ないことである。しかしこのような君主国においては虚弱な君主であってもなお国家を維持することができるような機構が整備されていなくてはならないのである。」[6]

こうみると皇太子フェルディナントの結婚を画策したメッテルニッヒはただ己の権力の延命を計っただけではなく、あくまでも相続順位に固執することによりハプスブルク家の秩序を護り、もってハプスブルク王朝の正当性を追求しようとしたのかもしれない。恐らく保守派たちは、これでこそ国家は維持される、と確信し、来る「虚弱な君主」を護り立てようと決意したのであろう。

一八三一年二月、フェルディナントはサヴォイ王国のプリンセス、マリア・アンナと華燭の典を挙げる。「皇太子フェルディナントの結婚式は祝賀会というよりは葬式のようなものであった。父帝すら『哀れな！』と洩らした」[7]と、さる伝記作者は書いている。老帝フランツI世、そしてメッテルニッヒは恐らくこの結婚になにも望みはしなかっただろう。この結婚から子供が生まれようなどとは露にも思わなかったであろう。マリア・アンナは「君主夫人としてではなく、宮廷付の看護婦としてウィーンに迎えられたのである」[8]。フランツI世はともかく皇統の正当な流れを擬制しようとだ

け考えたのであろう。一方、皇太子妃を送りだしたサヴォイ王家。なるほど、後に（一八六一年）オーストリアをイタリアから駆逐しイタリア統一をなし遂げた王家である。しかし、当時は未だ期が熟せず、隣接する超大国オーストリアと誼を通じる策を取る。そこで皇太子の情報をある程度はキャッチしておきながら、オーストリアの申し出を受けることにする。勿論、マリア・アンナの意志は問われない。政略結婚の常である。してみると、やはり皇太子の結婚は「哀れな」それであったのか。だがこの結婚でうまれた夫婦は、その後、激動・衰退するハプスブルク家のなかにあって、五十年以上の歳月を琴瑟相和し暮したという[9]。

とまれ、どんなに「哀れな」結婚であろうとも、よもやということがある。もし万々一にもそうなれば、生まれたばかりのヨーゼフから皇帝の座は急速に遠ざかる。こう考えるとゾフィーはいてもたっても居られない気持ちに襲われる。彼女はミュンヘンの母にその苦衷を訴えている。訴えることで自らを慰めようとしているかのようである。大丈夫、いや、ひょっとしたら。こんな安心と不安のあいだをいったり来たりしながらゾフィーは義兄夫婦の結婚生活を見つめる。しかし、彼女のこんな思いは冷静に考えれば全くの杞憂にすぎない。事実、フェルディナントとマリア・アンナは子供を儲けることはできなかったのだ。ところで、日頃のゾフィーは野心的で且つ冷徹である。こんな杞憂に身を窶すほど人間がやわには出来ていないはずである。それがこのていたらく。なにかあったのか。彼女は身体に変調をきたしたのである。妊娠である。

この妊娠が本稿冒頭に書いたように一八三二年七月六日のマックス誕生に結実する。このマックス誕生は兄ヨーゼフ誕生のときのようにもはや国家行事とはならない。まして、皇太子フェルディナントが結婚し、形式的にではあるにせよ、一応は皇太子家が整ったいま、マックス誕生は影薄いものとなる。その代わり、その薄い影に透けて見えるようにある噂が顕ってくる。出生に纏わる噂。

出生に纏わる噂とあらば、不倫の噂と相場は決まっている。勿論、これは単なる噂にすぎない。この噂を真面目に取り上げる史家を私は知らない。しかし、伝記作者としてはすこぶる興味ある噂である。マックスのその後の人生の大きな節目、節目にこの噂はひょいと現れ、彼の人生を悲劇に、悲劇にへと捩じ曲げているように見えるからである。またもや、廻り道となるかも知れぬが、マックス誕生前史の一部として、この噂を紹介することにする。

マックスの本当の父親は母ゾフィーの夫カール大公ではないのではないか、という噂がウィーン宮廷に流れた。ウィーン宮廷といえば、とかく堅苦しく息が詰まる、という風評がある。曰く、歩行、膝行、着座、答礼どれ一つとってもまさしく繁文褥礼[10]。例えば、御婦人は十六代前までに遡って貴族であることが証明されないかぎり宮廷への出入りは許されない(勿論、これにはいくつかの抜け道があり、すべてがこの通り適用されたというわけでは毫もない)。おまけにマックス誕生時の皇帝フランツI世は頑迷な保守主義者で猜疑心が異常に強い人物である。これだけでウィーン宮廷の雰囲気がいかに息の詰まりそうなものであるかがわかるというものだ。とても大公妃の不倫の噂など流れようもない、と。

しかし、フランツI世は確かに政治的には頑迷な保守主義者ではあるが、家庭的には人間的な人物であった。意外と洒脱な人物でもあったらしい。オーストリア国民を我が臣民とも、我が赤子とも見做すこの超保守的な皇帝はそれなりに我が臣民、赤子に心を配る。例えば、対ナポレオン戦争の際フランス軍により破壊され、そのままで放置されていた巨大な要塞(ブルク・バルタイ)を、平時になると取り壊し、庭園に改造し、いわゆる恩賜公園(現在のフォルクスガルデン)として市民に開放したりしている。だからこそ国民の間ではフランツI世は「善良な皇帝」として通っている。こんな人物が主宰する宮廷である。風評とは異なり大変のびやかな雰囲気があったと言われている。ゾフィー大公妃の不倫の噂も平気で取沙汰された所以である。因みに風評通りの息の詰まりそうなウィーン宮廷が出来上がったのはむし

ろもっと後のことである。それは、ほかならぬゾフィー自身がやがて念願叶い晴れて母后となり、母の言うことならなんでも聞く、多少マザー・コンプレックス気味のフランツ・ヨーゼフI世を押しのけて宮廷一の権力者となってからのことである。ゾフィーが有職故実を振り回し、妙な噂一つもたたせぬほどに厳格な宮廷を作り上げたのは、かつて自分が不倫の噂をおおっぴらにたてられたことへの屈辱感からかも知れない。

さて、不倫の噂。ゾフィー大公妃のお相手は誰か。ライヒシュタット公である。それでは、ライヒシュタット公とは誰か。話は時を遡り語られねばならない。

ゾフィーの舅、マックスの祖父フランツI世は一八〇四年までは神聖ローマ帝国皇帝フランツII世と名乗っていた。同年五月、希代の革命児ナポレオンは一七八九年のフランス大革命を置き去りにする恰好で、覇道専横の道をしゃにむに進むことを決意した。すなわちナポレオンはフランス皇帝を名乗ったのである。これをみてフランツII世は同八月、ハプスブルク家の家領保全のために突如としてオーストリア帝国皇帝フランツI世と名前を変えた。オーストリア皇帝とは忽然として湧いてきた名称である。いずれにせよ、これにより、ハプスブルク家領有の種々の王国、領邦すべてが史上初めてオーストリアという統一した名称となったのである（それまでオーストリアとは数多ある同家の一領地の名称に過ぎなかった）。一八〇五年フランツ帝はフランス皇帝と名乗りはするものの王族が生まれながらにして身に備えている「一種迷信的雰囲気」[11]のかけらもないコルシカ生まれの成り上がりものの野望を砕くべく三度目の対フランス戦争を仕掛ける。しかし、オーストリア、ロシアの連合軍は十一月五日アウステルリッツでまたもやコルシカ人の軍門に蹴散らされることになる。世に言う三帝会戦である（フランツ帝、ロシアのアレクサンドル帝、ナポレオン帝）。翌年、事ここに到りフランツ帝は神聖ローマ帝国終焉の詔勅を発する。数百年続いた神聖ローマ帝国は名実ともに滅んだというわけである。以降、フランツ帝はオーストリア皇帝フランツI世となるわけである。しかし神聖ローマ帝国最後の皇帝

という不名誉はついてまわる。光輝溢れる肩書を我が身から奪い取った憎きコルシカ人にフランツ帝は一八〇九年に最後の戦いを挑む。今回はオーストリア単独での対ナポレオン戦である。同年五月、帝の弟カール大公がアスペルンで軍神ナポレオンを初めて破る。しかし、この勝利もほんの束の間、同七月、ウィーン市郊外ワグラムであっけなく敗れ、またしても降伏。早速、シェーブルン宮殿で屈辱的講和条約が結ばれる。諸邦割譲。これは我慢できる。しかし……。

「陛下の御姫君マリー・ルイズ大公妃にフランス皇帝ナポレオンI世のもとに御輿入れいただくことこそが、我が国の危急を救う唯一の道かと思われます」という、ときの外相メッテルニッヒの進言をフランツI世はなんと聞いただろうか。フランス君主との縁組はハプスブルク家にとってまさに鬼門である。近くには帝の叔母にあたるマリー・アントワネットの例がある。フランス王妃となりながら断頭台の露と消えたマリー・アントワネット。我が娘にその二の舞を踏ませるのか。しかも、ブルボン家ならまだしも、もとはと言えば、コルシカ島の芥子粒ほどの小貴族の小伜にすぎない、あの成り上がりものにハプスブルク家の姫を嫁がせねばならぬのか。あの成り上がりものは、こともあろうに我がハプスブルク家の神君「敬虔なる国王ルードルフI世」（ドイツ王在位一二七三～一二九一年）を自分に譬え「余はわがボナパルト家のルードルフ・フォン・ハプスブルクである」[12]などとほざいているというではないか。許せぬ。

思いは千々に乱れたであろう。しかし、フランツI世といえども戦いの非情な掟をしらないわけではない。ナポレオンも糟糠の妻（？）ジョゼフィーヌを子なきゆえにと去らせ、ハプスブルクの血をいまかいまかと待っている。ハプスブルク家の姫君を、というナポレオンの要望は勝ちに乗ずる強圧的命令に等しい。フランツI世はメッテルニッヒの進言を遂に受け入れる。

こうしてナポレオンとマリー・ルイズは一八一〇年ウィーンにて結婚。翌年ナポレオンII世が誕生する。このナポレオンII世が後に長じてマックスの母ゾフィーの不倫の噂の相手となる。つまり、この噂がかりに本当ならば、本稿の主

人公マックスは実にあの大ナポレオンの嫡流の孫となるわけである。この噂が伝記作者の興味をそそる所以である。

俗に火の無いところに煙は立たぬ、という。なぜ、このナポレオンII世とゾフィーとの不倫の噂が立ったのか。思えばナポレオンII世の運命は寂しく薄幸である。先ず父ナポレオンの失脚と流刑地での死。残された幼な子は母マリー・ルイーズとともにウィーン宮廷に預けられる。かつてのフランス皇妃である母はパルマに所領を与えられ、息子を残しウィーンを離れる。母はその後、私生児を生んだり、二度も結婚を重ねるという自由奔放な女性である。ナポレオンとの結婚の際、「私こそがこの結婚になんの喜びも感じない唯一の人となるでしょう」[13]と言い切った女性である。「この結婚」でできた我が子をほったらかしにして顧みない。

フランツI世は、父を無くし、母に去られたこの初孫をさすがに不憫におもってか、殊の外可愛いがる。外孫ゆえにオーストリア大公の位を授けるわけにはいかない。そこでライヒシュタット公に叙してあげる。しかし、いくらフランツ帝の庇護があるとはいえ、ライヒシュタット公はハプスブルク家のかつての不倶戴天の敵ナポレオンの忘れ形見である。ウィーン宮廷にいて居心地がいいわけがない。萎縮する。どうやらこの公子は、父ナポレオンの類まれなる英雄的気質を余り受け継いでいないようである。ハプスブルク家の血が、つまり、かつての遠き祖先の武人としての猛々しい気性もすっかり影を潜め、その代わり洗練され尽くされた貴種の血が母を通して強く流れ込んだようである。もともとハプスブルク家とは家門をひたすら武運に委ねることに慎重な家系である。ライヒシュタット公は自分の運命をがむしゃらに切り開こうとした父ナポレオンの迫力が全く見られない。おまけに宿痾の肺病病みである。嫋々たる白皙の貴公子といったところか。

このライヒシュタット公とゾフィーはなぜか馬が合った。二人が初めて逢ったのはゾフィーが公子の叔父カール大公に嫁いできたときである。そのとき、公子は十三歳。彼は少年なりに十九歳の叔父嫁に淡い恋心を抱いたのかもしれな

い。ゾフィーはゾフィーで、自分より六歳も下のあぶなっかしいほど気の弱い、優しき公子に庇護すべき「弟」をみたのかも知れない。しかし、この頼りなげな「弟」もやがて成長し、男の臭いを振りまくようになる。いつまでも「姉」、「弟」の関係に留まるわけにはいかない。二人の間には危険な煙が立ち込めてくる。しかし、これだけでは噂は立たぬ。

噂がたったのはゾフィーがライヒシュタット公を献身的に看病したからである。公子は肺を病んだのだ。

公子が成長すると、彼の処遇が問題となった。ベルギー王、あるいはギリシャ王に即けてはどうかなどと、取沙汰される。しかし、いずれも列強の反対にあい、実現を見ない。かつて父ナポレオンに散々苦杯を嘗めさせられてきた列強はその息子が玉座に登ることに強い難色を示したのである。そこで、フランツI世は当場のつなぎにと公子に陸軍の一連隊をあずける。公子はこの祖父からの贈り物に狂気乱舞する。父ナポレオンたらんとして彼は全力で連隊長の職務に励む。篠突く雨のなか、降りしきる雪のなか、彼は兵士を陣頭指揮し、自らも行進に加わる。そのさまは父ナポレオンを髣髴とさせるくらいであった、という。しかし、無理がたたった。一八三一年秋、公子は胸を病む。医者の診断を聞き、彼は茫然となる。口惜しい。別に死を恐れているのではない。病名が問題なのだ。公子は日頃「自分は労咳などではなく、父の命を奪った胃癌に罹って死ぬのだ」[14]と自分に言い聞かせていたからである。

その頃、ゾフィーは妊娠する。妊娠しながらライヒシュタット公の身を案じる。公子の病状は一進一退を繰り返すばかりだ。やがて年があけ、初夏となる。ゾフィーのお腹も大分目立つようになる。例年のように宮廷はシェーンブルンに移る。病人も移される。公子の病状は急速に進む。しかし、それにしてもパルマに住む病人の母親はなぜ病床の息子を見舞おうとしないのか。感染を恐れているのか。それならば母親代わりに病人の世話をするのは臨月をむかえた妊婦ゾフィーをおいて他にいない。このとき彼女はお腹の子（後のマックス）への配慮を捨てている。ゾフィーはライヒシュタット公のために宮殿の美しい庭園に面した自分の部屋を明け渡し、自分たちはその隣に陣取る。さらに彼女は病人

を病人の父ナポレオンがあの歴史的なウィーン凱旋の際に使用したベットに寝かせてあげる。だが病状は容赦無く進む。妊婦特有の鋭敏な感覚がゾフィーに暗い予感を与える。彼女はバイエルンの母に宛てて「私はライヒシュタット公が私のお産のさいちゅうに亡くなるのではないかという気がしてなりません」[15]と書いている。

七月六日ゾフィーはマックスを産む。あの暗い予感は一先ず外れた。病床でマックス誕生の知らせを聞いたライヒシュタット公は力なく微笑む。傍らには母マリー・ルイーズがようやくついている。母は息子にゾフィーが産褥熱に苦しみ、起きる気力もなく床にふせっていることを話す。これを聞くと公子は母に「貴女はいま貴女が胸に抱いている乳児のためにも力強く生きていかねばならない筈です」[16]とゾフィーに伝えてくれと頼む。

ゾフィーの暗い予感は単に数日、日延べをして哀しくも的中する。マックス誕生の二週間後の七月二十日、ライヒシュタット公はついに息を引き取る。享年、わずか二一歳である。一方、生後二週間のマックスはすやすやと眠る。

労咳とは恐ろしい病気である。何よりも感染が怖い。患者にはなるべくなら近づきたくない、というのが人情である。ましてや、ゾフィーのお腹のなかでは新しい生命がゆっくりと成長しているのである。にもかかわらずゾフィーは患者を献身的に看病した。これをみて宮廷雀たちはゾフィーと患者ライヒシュタット公との間にただならぬものがあったと疑ったのだ。公子の死の二週間前に生まれたマックスは実は公子の子供なのではないか、と。これがマックス出生に纏わる噂である。

ともあれ、本稿の主人公マックスはこうしてこの世に生を享けた。野心的な母ゾフィー大公妃。凡庸な父（？）カール大公。この大公家は今上帝の次男坊家である。しかし、いずれはこの家がハプスブルク家の宗家となるだろう。だが、せっかく宗家となったとしてもマックスは次男である。マックス誕生のわずか二年前に、兄フランツ・ヨーゼフが誕生しているからだ。そして兄の誕生はオーストリア帝国の国家行事であった。それにひきかえ、マックスの誕生には暗い

噂がつきまとう。

こんな前史をもって生まれたマックスはハプスブルク家のなかで極めて重要な地位を占めるプリンスとして、しかし、決して第一人者にはなれぬプリンスとして成長することになる。そんなマックスは母ゾフィーから受け継いだ野心的な性格のためにやがて自身の恐ろしいまでの人間業とのただならぬ対決を迫られていくことになる。とはすなわち、兄ヨーゼフに二年遅れて生まれたという事実に鼻っ面を引きずりまわされながらその悲劇的な人生を歩むことになるのである。以下、本稿はその過程を追うことになる。それにはマックスが物心ついて初めてその「事実」と、自身の抑えようもない人間業と否応なく対面させられたあたりから説き起こすのが最も都合がよいだろう。それがマックスの人生の第一の大きな節目となったからである。それはマックスが十六歳になったときのことである。（この頃続く）

注

1) Holler, Gerd : Gerechtigkeit für Ferdinand. Wien (Amalthea) 1986, S. 139.
2) Anders, Ferdinand u. Eggert, Klaus : Maximilian von Mexiko. Wien (Niederösterreichisches Pressehaus) 1982, S. 9.
3) Ebenda. S. 9.
4) Andics, Hellmut : Die Frauen der Habsburger. Wien (Jugend und Volk) 1985, S. 198.
5) Ebenda. (Anm. = 1). S. 140.
6) アーダム・ヴァントルツカ（江村洋訳）：ハプスブルク家（谷沢書房）１９８１年。２１３頁。
7) Corti, E. C. C. u. Sokol, H : Kaiser Franz Josef. Graz Wien Köln (Knauer) 1960, S. 11.
8) Ebenda. (Anm. = 4). S.208.
9) Vgl. Holler, Gerd (Anm. = 1).
10) 須永朝彦：黄昏のウィーン（新書館）１９８６年。12頁。

11) ジョゼ・カバニス（安斎和雄編訳）：ナポレオンの戴冠（白水社）1987年。15頁。
12) 前掲書（Anm.＝6）。70頁。
13) Ebenda.（Anm.＝1）. S.100.
14) Haslip, Joan : Maximilian. München (Heyne). 1972, S. 12.
15) (16) Ebenda. S.12. , S. 13.

Der tragische Kaiser von Mexiko, Maximilan I.

… Die Vorgeschichte der Geburt Maximilans …

Yoshio Kikuchi

Diese Arbeit behandelt die Tragödie eines Kaisers. Der Kaiser heißt Ferdinand Maximilan I. von Mexiko. Maximilan, der jüngere Bruder des späteren Kaisers Franz Josef I. von Österreich-Ungarn, wurde am 6. Juli 1832 als zweites Kind des Erzherzogs Franz Karl von Österreich und seiner Frau Sophie von Bayern in Wien geboren. Daher wurde er gewöhnlich nur Erzherzog Ferdinand Maximilan von Österreich genannt. Aber als er dreiunddreißig Jahre war, wurde er auf Veranlassung Napoleons III. von Frankreich die Kaiserkrone von Mexiko angeboten. Maximilian nahm am 9./10. April 1864 die mexikanische Kaiserkrone an und verzichitete damit auf die Erbfolge in Österreich. Diese Krönung des Prinzen von außen war aber nur eine Farce; dieses war nur ein kleines Ereignis der militarischen Intervention von Frankreich in Mexiko. Wenigstens meinten und meinen die meisten Mexikaner so. Daher, „akzeptiert die mexikanische Geschichtsschreibung ihn (= Maximilian) bis heute nicht als Kaiser."[1] So wurde Maximilan am 19. Juni 1867 in einer kleinen Stadt in Mexiko, Qurétaro durch die republikanische Regierungsgewalt erschossen. Dabei mußte er nicht als der Kaiser von Mexiko, sondern nur als der Erzherzog

von Österreich sterben. Dieser Tod geschah nur drei Jahre nach „seiner Krönung von Mexiko". Meine Arbeit sichert die Spuren Maximilians bis zum tragischen Ende im fernen Mexiko so ausfürhlich wie möglich.

Aber zuerst möchte ich über die Vorgeschichte der Geburt Maximilans erzählen. Denn diese Vorgeschichte der Geburt war, vor allem im Fall von Maximilian, einer der wichtigsten Faktoren, die sein Schicksal bestimmten.

Da der Sohn des Kaisers Franz I. (= des Goßvaters von Maximilan), Kronprinz Ferdinand (= der Onkel von Maximilian), keine Nachkommenschaft hatte und „wohl auch keine zu erwarten war, kam den Kindern des jüngern Bruders (= des Vaters von Maximilan) die Rolle späterer Thronprätendenten zu. Entsprechend war auch schon die Geburt des ältesten Sohnes Franz Josef Carl, des nachmaligen Kaisers, am 18. August 1830 ein besonderes Ereignis gewesen."[2] Aber Maximilian wurde als zweiter Sohn geboren. Das heißt : Seine Geburt war nicht mehr der „Staatsakt" so wie die Geburt Franz Josefs. Das hat den dunkeln Schatten auf das Leben des ehrgeizigen Maximilians geworfen.

Die Geburt Maximilians war nicht so feierlich, während die Geburt des älteren Bruders wie die Faschingsfeier gefeiert wurde. Statt dessen verbreitete sich ein Gerücht über seine Geburt. Ein unsittliches Gerücht ! Maximilians Vater soll nicht der Erzherzog Franz Karl sein ! Maximilian soll ein uneheliches Kind sein ! Nun, wer ist sein Vater ? Mit wem hat es die Erzherzogin Sophie, die Mutter Maximilians, zu tun gehabt ? Allerdings ist dieses Gerücht nur ein fragwürdiges Gerücht. Aber dies war auch einer der wichtigsten Faktoren in seinem Leben.

Mit einem Wort : die Vorgeschichte der Maximilians Geburt war durch diese sehr interessanten Sachverhalten gefärbt. Und das interessiert mich sehr. Das ist der Grund zum Schreiben der Vorgeschichte der Geburt Maxi-

milians.

Anmerkungen.

1) Hamann, Brigitte : Mit Kaiser Max in Mexiko. Wien (Amalthea) 1983, S. 11.

2) Anders, Ferdinand u. Eggert, Klaus : Maximilian von Mexiko. Wien (Nieder-Österreichisches Pressehaus) 1982, S. 9.